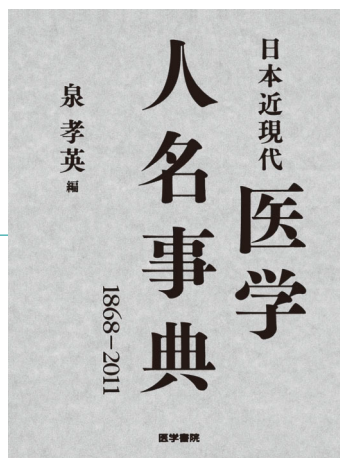


日本近現代医学 人名事典(1868-2011)

編 泉孝英

定価 12600 円(本体 12000 円+税 5%)
医学書院



厚さ 5cm に詰め込まれた、 医療関係者の深い歴史

本書の書評を依頼された時、5cm ほどもある分厚さを前に、思わず「どなたか別の方に…」という言葉が口をついた。編者の泉孝英氏は、1936(昭和11)年生まれ、1960(昭和35)年京都大学医学部卒とのこと故、筆者とはほぼ同年代である。よくもここまで纏められたことと感心した。しかし、読み始めた途端にのめり込んだ。本書は、1868(明治元)年から2011(平成23)年までの145年間に、日本の医学・医療に携わった3762名の方々に関する記録集である。医師、看護職はもちろん、医療に関わられた法律家や行政官も対象となっている。

日本の看護黎明期では、外国人ナ-

スのツルー、ヴェイッチ、その教育を受けて東大病院初の外科看病婦取締となった大関和、いま話題の新島八重など。戦後では、新たに設立された日本看護協会の井上なつえ会長、厚生省看護課初の看護職保良せき課長、さらに1952(昭和27)年に設立された初の看護系大学の高知女子大学の和井兼尾や、その翌年にできた東京大学医学部衛生看護学科初代主任教授の福田邦三、基礎看護学の湯植ますほか、各地の実践現場で活躍された、今は亡き方々のお名前とその活動歴が収載されている。

看護の歴史と医療関連事項を 同時に確認

1960(昭和35)年7月に、東大衛生看護学科3期生の筆者が、初めて大卒看護職第1号として厚生省保険局医療課

に入省した頃、看護課は廃止されていた。国民皆保険が達成される前年であり、その年の秋には看護職が中心となった病院ストが起こった。日本の保健医療制度が未確立だった時代に看護行政を推進されてきた、当時の医務局医事課看護参事官だった金子光氏ら、直接お世話になった方々の名前に出逢い、懐かしく当時を思い起こした。

こうしてこの人名事典をめくり、おひとりおひとりの功績を拝見すると、これらの方々やそのご父兄が、どれほど我が国の医学・医療の中心で活躍され、立派な仕事をされてきたのかを知り、あらためて超一流の先生方、関係者に育てられた幸せを確認させられた。それと同時に、卒業後は、それぞれ果敢に石ころだらけの道を切り開いてきたと思うものの、どれほどその期待に応えた活動ができたのかを省み、今後も看護の専門職化と後輩の育成にさらに尽力しなければとの思いを深くした。

本書は人名事典としてだけでなく、文献や資料さらには年表並びに書名の索引も付されている。「社会」として“鳥羽・伏見の戦い”，「医事」として“軍陣病院設立”ほか、「医療行政」「医学」といった項目ごとにその年々に起こった事実が記載されていて、医療史を確認する際にも役立つ。看護の歴史を読みつつ当時の医療関連事項を確認できるのは、多忙な看護職にとっては有り難いことである。温故知新、新しい看護職のあり方が問われる重要な時期にある今、各大学や各県看護協会に本書が備えられ、看護職の方々や学生に活用されることが望まれる。

医療関係者の歴史から知る、 新しい看護職のあり方

〔評者〕 草刈淳子 獨協医科大学大学院特任教授
愛知県立看護大学名誉教授、元学長